

## 北中も例外ではありません

今朝の中日新聞に気になる記事をみつけました。気になったのは、私が北中の校長だからかもしれませんが。

「理化学研究所などのチームは二日、スーパーコンピュータ『富岳』を使い、新型コロナウイルスの感染リスクを試算した結果を公表した。マスクを着用した感染者と15分間会話した場合、1メートル以上距離を取るとオミクロン株でもほとんど感染リスクはなかったが、**50センチメートル以内に近づくと最大で30%程度リスクが上昇する結果**となった。理研の坪倉誠チームリーダーは『隣同士で会話するようなシーンでは、**距離を取る、接触時間を短くするといった対策が必要だ**』としている。」

ウイルスは目に見えません。症状が出て初めて「感染したかも」という心配が生まれます。したがって、記事のようなスーパーコンピュータを使って数値で出した感染の危険性を謙虚にとらえ、全力で予防に努めなければなりません。

学校生活において、意識を高くして感染予防に努めている皆さんですが、私はある場面において、かなり心配しています。それは授業中です。

授業を見て回っていると、交流という学習活動が行われている場面に出くわします。仲間と関わりながら学習を進めていくことは大切なことですが、その時にかなり至近距離で取り組んでいる姿が見られます。また、交流でなくても、二人で顔を近づけてタブレットの画面を見ている姿や、席を出歩いてお目当ての仲間とかなり近い距離で言葉を交わしている姿などがあります。どちらも、50センチメートル以内の至近距離で行われていることが多いようです。学校に來ている生徒や職員は、コロナ感染の心配がない者ばかりだと思いたいのですが、そうであれば世の中にクラスターは生まれません。一見すると大丈夫そうに見える集団の中に、感染した人物がいるからクラスターが発生します。北中も例外ではありませんよ。初めにも書きましたが、自分が感染しているかどうかはわかりませんし、無症状の人もいますから、何も異状がない時に細心の注意を払わなければならぬのです。感染してからでは遅いのです。

その点は、職員もしっかり意識すべきです。安易に交流を指示しないこと。生徒たちと交流を指示するなら、感染予防のための指導や指示を確実にした上で、生徒たちの交流の姿を最後まで見届けるところ。一部の生徒に対する指導に集中するあまり、他の生徒の姿を見届けることができない状況を作らないこと。その学級がクラスターになったら、それができていたかどうか問われます。

全国の感染者、岐阜県の感染者、瑞浪市の感染者はどんどん増えていくことをあなたはもちろん知っていますよね。「対岸の火事」だと思っただけじゃありませんよ。火の粉はいつ飛んでくるかわかりませんからね。